

国指定重要文化財旧済生館本館

郷土館だより

No.94

令和 2. 3. 31 発行

〒990-0826 山形市霞城町1番1号
山形市郷土館 TEL/FAX 023(644)0253
URL <https://www.city.yamagata-yamagata.lg.jp/kakuka/kyoiku/shakai/sogo/yamagatasikyoudokan.html>

旧済生館病院の円形平面と建築オーダーの意味について

東北大学大学院 工学研究科
准教授 飛ヶ谷 潤一郎

山形市の旧済生館病院（以下、済生館と略記）は擬洋風建築の代表例の一つです。擬洋風建築とは、幕末から明治初期にかけて日本の大工が西洋建築を見よう見まねで設計したもので、和洋の要素を兼ね備えているのが特徴です。本稿では済生館の際立った特徴である円形平面（あるいはドーナツ形平面）と建築オーダーに着目して論じることになります。

済生館の建物は、正面に突出した4階建ての塔と背後の円形中庭を取り囲む平屋の二つの部分でおもに構成されています。しかし、この建物が現在の場所に移築される前には、ほかにも複数の病棟などが周囲に建てられていました。この建物はそれらの中では周囲からひととき目立つ宗教建築のような存在でした。けれども、寺院の五重塔や城郭の天守に円形平面が採用されることはまずありませんでした。

そもそも日本の伝統的な木造建築に円形平面の例はほとんどありません。なぜなら主な構造材は直線状の柱や梁ですので、曲線の造形には適していないからです。寺院には確かに円堂という建物がありますが、実際には八角形平面でつくられています。済生館も正確には十四角形平面ですが、西洋の建築が設計の手本にされたことは間違いありません。本稿では済生館のデザインを決定したのは誰なのかという問題には立ち入りませんが、当時の大工が技術的な困難を承知しながらも、新しいデザインに挑戦した点は称讃に値するでしょう。

済生館の手本にされた円形平面の建築として、藤森照信氏は横浜イギリス海軍病院〔図1〕を候補に挙げていますが、類似点だけでなく、相違点も見られることは指摘しておきます。済生館は内側の中庭に対しては開放的ですが、外側に対しては窓が並んではいるものの壁で閉ざされています。正方形平面であれば、こうした手法はヨーロッパの修道院回廊に多く見られ、ほかにも大学や病院など集団での生活を必要とする複合施設にはしばしば採用されています。一方、横浜イギリス海軍病院についてみると、各部屋の入口は内と外の両側にあり、いずれにも列柱廊が設けられていることから、全体が開放的なつくりとなっています。病院では入退出者の管理が重要ですので、建物全体は塀などで囲まれ、二つの受付がその役割を果たしていたと思います。

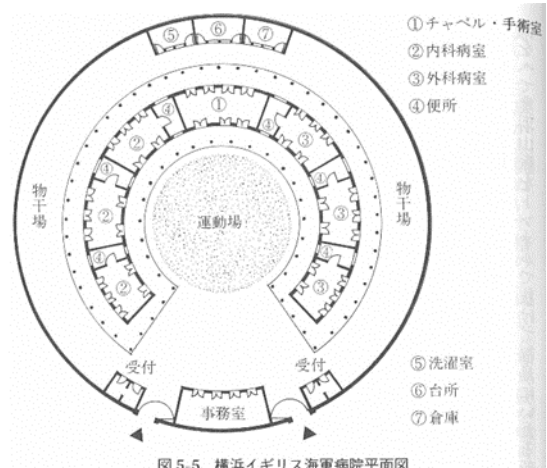


図5-5 横浜イギリス海軍病院平面図

図1 横浜イギリス海軍病院

(藤森照信『日本の近代建築 上』岩波書店 1993)

さて、ここで管理や監視という点から円形平面に着目すると、ジェレミー・ベンサム（1748－1832年）によるパノプティコンという全展望監視システムが思い浮かびます。このシステムが刑務所に用いられると放射状の平面形式になりますが、当初はローマのコロッセウムのような円形平面で提案されました。また、左右対称形の学校建築ではしばしば校長室が中心部に特権的な位置を占めます。しかし、院長などが塔からすべてを見渡すことは、済生館では意図されていません。三島通庸は県令として政庁舎や学校など多くの公共建築に関与しましたが、なぜ済生館でのみ円形平面が採用されたのかはいまだに謎のままです。

次に済生館の建築オーダーに着目してみましょう。英語のオーダー（order）は、一般には「秩序」や「命令」などを意味しますが、建築用語としてはギリシアやローマなどの古典建築における柱と梁からなる部材の比例体系を意味します。もっと単純に説明すると、柱頭の形でドーリス式やイオニア式、コリント式オーダーのように見分けることができます。古典建築で比例関係が重視されたのは、円柱は人体を手本につくられたからですが、日本の大工は柱頭などの形をまねるだけにとどまりました。そのため済生館を含む山形県の擬洋風建築では、最も単純なドーリス式が多く採用されたのでしょうか。しかしさらに興味深い点は、済生館などの擬洋風建築では、柱頭の上には梁や桁のような水平の構造材ではなく、

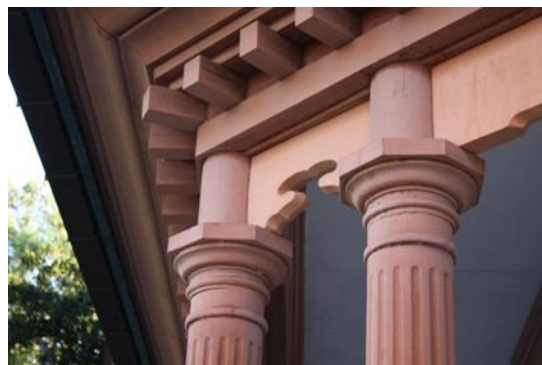


図2 旧済生館本館正面入口のドーリス式柱頭と幕板

化粧材のような幕板が載せられていることです〔図2〕。こうした幕板は寺院建築などの切妻に垂れ下がる懸魚を模したと考えられますが、なぜこうした構造的に不安定なデザインが選ばれたのかは不明です。

ここで西洋の円柱が下で、日本の幕板が上という上下関係に注目すると、戦前の昭和初期に流行した帝冠様式が想起されます。これは和が洋を支配するという国粋主義的なデザインで、洋風の壁構造に和風の瓦屋根が載りますが、西洋建築にもしばしば同じような手法が用いられます。たとえばエジプトのオベリスクや古代ローマの記念柱の頂に十字架を載せるのは、異教に対するキリスト教の勝利を意味します。明治初期の大工たちも西洋の建築をまねるだけでなく、日本の伝統に強い誇りを抱いていたことを示したかったのかもかもしれません。

PICK UP!

旧済生館本館建築 柱編

旧済生館本館の柱は、統一された様式ではなく、複数の建築様式が取り入れられています。

1階の正面入口のテラスに使用されている柱は、ドーリス式です。古代ギリシア時代初期の建築様式で、柱頭部分（柱の上部）は比較的シンプルな装飾が施されています。

対して、3階のベランダ（正面の特徴的な星形ステンドグラスが見える階のベランダです。）に使用されている柱は、コリント式です。古代ギリシア時代末期の建築様式で、ドーリス式と比較すると、複雑な装飾が施されており、華やかな印象を受けます。

このように、旧済生館本館では異なる様式の柱が各所で用いられており、様式の統一は図られていません。

3階のベランダは通常非公開ですが、年3回実施する3・4階特別公開や旧済生館本館見学会で、見ることができます。



3階ベランダ柱頭

（山形市郷土館）

令和元年度の新指定文化財

山形市教育委員会では、令和元年10月2日付で、宗教法人慈光明院で所有している2件の文化財を山形市指定有形文化財として新たに指定しました。

指定した2件の文化財についてご紹介します。

(1) 木造浮彫(香合仏)愛染明王像

- 【名称】木造浮彫(香合仏)愛染明王像
 附 光背(蓮弁形・雲文) 一点
 台座 一点
 厨子 一点
- 【種別】彫刻(美術工芸品)
 【材質】木造
 【制作年代】鎌倉時代(附は江戸時代)
 【寸法】4.2 cm(台座・蓮弁含む)
 像のみ 3.0 cm 光背の高さ 10.6 cm



木造浮彫(香合仏)愛染明王像



像部分拡大

径6.0 cmの木造円形の香合形の身の内部に愛染明王像を浮き彫りにしたものです。愛染明王像の体型や肉体表現から、鎌倉時代に制作されたものと推定されています。

香合仏は江戸時代に作られた光背に嵌め込まれ、同じく江戸時代に作られた台座に立てられています。光背と台座は、香合仏自体より新しいものですが、それぞれ豪華な作りとなっており、香合仏の重要性を物語るものになっています。

愛染明王像の香合仏は、「身に付けておけば、災いを防ぐ」というもので、遺品としては数の少ないものです。その作りの優秀さとともに、珍しい作例となっています。

もとは、寒河江・慈恩寺の一院である禅定院から移されたもので、慈恩寺由来の遺品であると考えられています。

(2) 銅製聖観音懸仏

- 【名称】銅製聖観音懸仏(羽黒権現御正体)
 【種別】工芸品(美術工芸品)
 【材質】銅製
 【制作年代】宝徳2年(1450年)
 [室町時代後期]
 【寸法】外径 30.0 cm(上下)



銅製聖観音懸仏

木製の円形の板を銅製の板で覆い、その表面に聖観音像を貼り付けた懸仏です。

直径は上下で30.0 cmと比較的大きく、室町時代の形式を完備しています。

聖観音像そのものの体つきの表現は簡略化されていますが、持物が聖観音像とは別に造られており、丁寧な作りで、室町時代の上質な作品といえます。

背面には、制作当初のものと思われる「宝徳二年庚午六月吉日／(種字・サ)羽黒大権現御正躰／奉懸宝前院別當宥口(達カ院カ)」の墨書があり、室町時代に作られたことがわかります。室町時代の懸仏の基準になる作例です。

また、「羽黒権現御正躰」と明記されるものとしては、現在最古のものであり、羽黒信仰の歴史的遺品としても注目されます。



聖観音像拡大



背面墨書

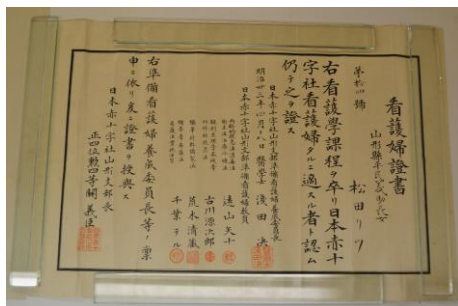
令和元年度 郷土館の事業等

1 展示活動

令和元年度は次の企画展を行いました。

(1) 「令和元年度 山形市郷土館・郷土資料収蔵所 新収蔵品展」(6/21～7/21)

平成30年度に郷土館と郷土資料収蔵所にご寄贈いただいた市立病院済生館看護婦卒業写真1点、看護婦證書1点 他7点の新規収蔵資料を展示し、新たな収蔵品の紹介を行いました。



『看護婦證書』

(2) 山形市郷土館秋季企画展「山形市のこれまでとこれから」(9/21～11/24)

市制130周年を迎えた山形市の市制施行以降の歴史や文化について古写真を中心に資料を展示しました。



初代の山形市役所庁舎
(展示写真の内の1枚)

(3) 山形市文化財成果展 (12/21～1/26)

平成30年度に山形市内で行われた発掘調査の成果や日本遺産「山寺と紅花」、令和元年度新指定文化財に関するパネルや新収蔵品の展示を行いました。

2 イベント

郷土館では、建物や展示資料など、より多くの方に魅力を知っていただくため、見学会等を開催しています。

(1) 旧済生館本館見学会

平成25年度から開催している「旧済生館本館見学会」を今年度は2回(6/29・11/30)開催しました。当日は小形利彦氏(6月)・伊藤眞司氏(11月)を講師に迎え、建物や展示資料のくわしい解説、通常非公開の3・4階の公開を行いました。

(2) 旧済生館本館3・4階特別公開

平成28年度から開催している事前申し込み不要の「旧済生館3・4階特別公開」を今年度は4回(5/31・7/27・9/28・10/23)開催し、県外からも多数ご参加いただきました。



廻廊の説明

3 寄附等の受け入れ

今年度は、大正時代の医学書(個人)等をご寄贈いただきました。

また、山形ロータリークラブ様より、「山形市郷土館環境整備」として環境整備備品をご寄付いただきました。

令和2年度 郷土館の事業予定

- (1) 旧済生館本館見学会(定員15名)
- (2) 旧済生館本館3・4階特別公開
- (3) 山形市郷土館・郷土資料収蔵所 新収蔵品展(6～7月予定)
- (4) 山形市郷土館秋季企画展(9～11月予定)
- (5) 山形市文化財成果パネル展(12～1月)

各事業の詳細は広報やまがた・山形市ホームページ等でお知らせします。

郷土館事業のお問い合わせ
山形市教育委員会 社会教育青少年課文化財保護係
〒990-8540 山形県山形市旅籠町2-3-25
TEL: 023-641-1212(内線626/627)
FAX: 023-624-8443
E-mail: shakyo@city.yamagata-yamagata.lg.jp